

できたものは、たたかいたの武器をみずからのうちに発見し、近代的な階級意識にめざめてゆく、阿Qのような民衆たちのたたかいたいという、この一線にはかならずとおもう。

竹内好氏流の阿Q、あるいは魯迅理解がまことに独自なすくれたものだとはおもわうけれども、それにしてもわたしは、仁井田氏独自の阿Q、あるいは魯迅理解のうえになつて、そこに展開される中国の法理論を教示していただけたらとおもう。それをこそわたしは大いに期待したい。

まえにものべたように、本書にもられた個々の論文については、それらがこの「中国社会の法と倫理」の展開というふうな構成されている以上、そうとりあつかうべきだとおもうので、細く分析をすることはやめた。紹介としてはまことに不十分であるかもしれないが、どうかおゆるしをねがいたい。また、法学ということについては、まづたくのしろうとである筆者であるから、本書の真価をあますところなく伝えるどころか、かえつて見当はずれになつておられることをおそれる。それはわたしの力量不足のいたすところであつて、

仁井田氏のすぐれた業績とはかかわりのないことをおことわりして、仁井田氏におわびするしだいです。(一九五四・七・一二)

(昭和二九年二月、弘文堂刊 法原理叢書  
A5版二二六頁 価四五〇円)

——池田 誠——

## 二つの都市調査報告書

近年、市制を施行する地方自治体が多く、ことに本年は三月末から四月初にかけて八〇余の新市の誕生を見た。「市制ブーム」と呼ばれた此のような事態は、昨昭和二八年一月一日に施行された町村合併促進法にもとづいておこなわれた町村合併の結果一時的に現われた特別な現象であるが、此等の新市中には形式だけの市制を実施する事に急で、単に人口総数のみを基準の三万に揃え、連根戸数六割、都市的産業に従事する者の世帯人口六割の線は適宜に解釈されて、真に都市としての機能も態勢も整つていないものが数多く見られ、また従来の行きがかりや一時の利害関係から、当然合一さるべき町村が合併されずに不自然な結合を遂げるものも少くな

い。かかる状態の間にあつて都市の実状を知り真にその将来の進むべき方向を定めようとして、各地に広く総合的観点にたつた調査が行われ出した事は喜ぶべき現象であり、我々都市研究者に対しても好個の資料を提供してくれている。最近その調査報告が出版されたものに瀬戸・明石・豊中・武蔵野・浜松等があるが、その中で偶々時を同じくして發表された武蔵野と豊中の両調査は、両都市が何れも我国の典型的巨大都市 Megalopolis である東京と大阪の衛星都市 Satellite City であり、しかも共に洪積台地上に立地して中心都市の居住地域の機能を有する所謂住宅都市であるという共通の性格を有している点で興味ある比較を行うことが出来る。しかしまたその調査の目的・方法等に於ては夫々異つた特徴を有し、そこにも興味深い対照を示しているのである。即ち武蔵野に於てはその研究者は現地在住者を糾合して構成され、その報告も個々の研究分野に於て独立してなされており、また目的はどこまでも學術的実態調査としての範圍に止つている。これに反して豊中の場合は外来の既存研究団体に委嘱してなされて

おり、その目的も報告も極めて現実的な市政の見地から貫かれている。此のように同じ性格を有する地域に対して全く異なる方法で行われた共に総合調査と銘うつ此の二調査報告の方法と内容に就いて主に地理学的立場から能う限りの論評を試みてみよう。

### 成蹊大学政治経済学会

#### 武蔵野市(上)

本報告書は昭和二六年以来、成蹊大学政治経済学会が学会活動の一端として総合社会調査のフィールドをその所在地である武蔵野市に選び、市当局の協力を得て実施して来たが、その第一年度の成果をまとめ上げたものであり、引続き下巻も公刊されることになっている。その目的とする所は野田信夫「総合社会調査の意義」が述べている如く、通常別個に取扱われて考究されている社会・経済・財政の諸問題の一つにまとめて、われわれの生活に近い面でつかむにあり、その為には地域社会の総合調査が適するから……と云う極めて純学問的なものである。しかし同地の実態が解明される事はその行政を担当する当事者にとつては貴重な参考資料となり、実際の

な利用方法も十分考え得るものである。

調査の実施に当つては主として武蔵野在住の同学会々員によつて夫々その専門分野に依つて個性的に行われて居り、従つてその報告も個別的に論文集の形式をとつてゐる。此の方法は戦後数回行われた学会連合による地域総合調査の際にとられた方法で、その都度分担者相互間の連絡と総合性に欠ける点で批判の対象となつてゐるものであるが、それに対して積極的な打開策は何等講じられていないのみならず調査実施の方針、具体的な方法として分担範囲の区分、班編成は如何になされたかは、かかる総合調査の場合には当然目的と共に明確にさるべきであるが、本報告書には示されてなく、次の内容目次をみても何等系統的なものを感じられない。

- 一、総合社会調査の意義(野田信夫)
- 二、武蔵野市の沿革(小島鉦作)
- 三、市勢の一般(関島久雄・平井正一)
- 四、市政の一般(竹内敏・宮島芳夫)
- 五、歴史的発展(藤原音松)
- 六、気象(加藤藤吉)
- 七、武蔵野台地の地下水(伊藤隆吉)
- 八、人口分析(巽博一)
- 九、市民所得の構造(中村清一)

- 一〇、市民所得の階層別分布と租税負担(肥後和夫)
- 一一、交通(伊藤隆吉)
- 一二、公益企業(関島久雄)

尚上巻は同市市制五周年記念に間に合わせるために二七年九月迄に調査完了の部のみをまとめて出版されたとの事で、この事も如上の混乱を大きくした一因であらうと思われる。後援者としての市当局の事情にもよるものであらうが暫時猶予を置いて全調査の完了を待つて研究を整理すればよりよき報告書が出来たものと思われる。

また武蔵野市は東京都区部(旧東京市)西郊に隣接する一衛星都市であるが、その境界部に於ては何等の具体的な区画も見られないままに全く連続して杉並区に接している。此の点、個々の論文中には夫々東京都区部の關係が説かれてはいるが、東京 Metropolitan District (大都市地域) に於ける本地域の位置づけは、此の調査の結論の重要な一部をなすものと思われるにもかかわらず、総括的に此の点をとりあげていないのは残念である。

また研究主体が政治経済学会なる一学会で

あるため、そのメンバーのみで完全なる総合社会調査を完成する事は困難であり、当然他の分野の自然科学、地理、歴史等の研究者の援助を必要とするのであるが、その際、その調査目的に応じて出来得る限り広く活動すべきであり、例えば本調査に於ける地理学関係者として研究分担した地下水調査は永年における研究の集積として貴重な労作であり、また地下水自体が曾ては水不足の為に開発の後れた洪積台地の武蔵野にとつては重要な研究課題であるが、なおより広く地形・土壌・植生等自然地理一般に互つての問題を取り上げる事が必要なものではあるまいか。同様に歴史部門からの参加者は先に「武蔵野市史」の著作もあり、近世における武蔵野の開拓を中心として研究の成果をあげているが、此の場合直接関係は乏しいにしても、先史時代の遺跡、古代の国府・国分寺、中世の所屬、各時代の交通路との関係等に就いても概述するべきではないだろうか。

また素紙裏に地図が用いられているが、中央折込部は見難く単に装飾としての意味よりなく、装飾としては余りにも貧弱である。調

査全般に互る基本図として調査地域全国は修正測図された二万五千分の一地形図もあるものであるから大梯尺の地図を、より広範囲に東京 Metropolitan District の關係を示す地図と共に折込図として是非加えらるべきである。尚細事に互るが附図は専門製図家の手を経ていないが数字等には不明瞭のものがあり、円をフリーハンドで画いたものもある等にはあまりにも雑駁の感を受ける。

個々の論文の内容については評者の専門外に属するものが多いが、全般として、具体的に詳細なデータを蒐集して行われたものには内容的に充実が感じられ、都市研究資料としても価値が高い。また本報告書は上巻のみで五五〇頁に及ぶ大部のものであるが、論文相互間にかんがりの重複事項も見受けられ、また論文中には不必要と思われる叙述がないでもない。

要するに、本報告書は同一地域を取り扱つた単なる論文集としては価値ある研究を含んでいいるが、所期の目的である諸問題の総合的把握の点では成功しているとは云い難い。

以上は上巻のみを通読しての感であり、調査

者にとつては心外であるとされるかも知れぬが、下巻に於て総合性が發揮されれば単に一般都市研究のみならず最近問題多大である Metropolitan District 研究上極めて貴重な指標となるであろう。(A5判・五四八頁・昭二八年二月・武蔵野市市役所刊・非売品)

#### 東京市政調査会

#### 豊中市総合調査報告書

本調査は豊中市が市制施行一五周年記念事業として東京市政調査会に委嘱して行つたものであり、その目的と方針は次に掲げられる如く極めて明確なものである。

目的 都市計画の再検討、下水道基本調査、地域決定の再検討等が進行中の本市として、さらに各般の都市総合計画樹立の資料とするため都市総合調査を行う。

調査方針 都市の構成が適当かどうか。イ、地域の拡張が必要か。ロ、大阪特別市制実施の場合における本市のあり方。ハ、大阪市との相関性。ニ、都市の性格。ホ、財政上から考へた豊中市の将来。ヘ、将来の都市施設とその実現策。

以上の如く専ら市政と云う極めて現実的な

問題に対して明確な目的と方針を最初に確立し、その実施に当つての最適の研究者として既存の研究団体である東京市政調査会を選んだ事は市当局者として適切であり、本調査が一応の成功をみたのもその点にあると思われる。但し果して本調査が総合調査と呼ばれるべきものであるかどうかという点に於てはいさ

さか疑問が生ずるのである。即ち目的と方針に於て調査の方法が選ばれるのであるが、与えられた問題の横わる分野にのみ解決の鍵は存するものでなく、より広い分野にも尚補助的な鍵は幾多もあるものであり、市政と云う極めて現実的な問題を解決するためにも、尚、自然環境、過去の歴史等直接的には関係のなさそうな分野にも立入る必要があるものであり、かかる意味に於て総合調査の意義があるのではなからうか。本調査が此の点に考慮をばらつていないのは残念である。しかし本調査は上述の目的と方針に従つて東京市政調査会の強い一貫した態度で貫かれており、調査研究員相互間の連絡も極めて緊密で、報告書に於てもまとまつた体裁を整えて居るが、そのために個々の研究者の個性の立入る隙は

全くなく、その点過日の京都における都市学会大会に於て、「例年同会の編纂している都市年鑑的である。」との評も生れた所以である。

さて報告書は第一部「豊中市の実態」と第二部「豊中市政に対する考察」とに分れ、初めに豊中市の成立と存在に最も重要な関係を有する大阪 Metropolitan District の構造を解明し、衛星都市としての豊中の性格を明確にし、而る後豊中市自体の問題を取上げているのはまことに當を得たものと云い得る。ここに我々にとつては最も興味深い第一部に就いて主に論評を進めてみたい。大都市の構成に關しては E. G. Burgess の Concentric Zone Theory を基本的な考え方としており、夫々の衛星都市の位置づけを行い、豊中はその最外郭の Commuter's Zone に入るとしているが、衛星都市群を大阪を中心とする各方向毎に分けている点では Homer Hoyt の Sector Theory 的な考え方も採用しているようである。地形・地質が複雑で鉄道が主要交通機関とされている日本の都市では後者がよりよく該當するように思われるが、両論の可否はさ

ておき方向のとり方に於て機能の場合は東西南北の四方向をとり、人口流動の際には交通路の方向に従つて細かく九方向にとつてあたりするのは、既往の調査・文献からとつたものにせよ不統一であり、またこの構造を示すには多くの図を用いるべきであらう。

さて此のような観点により豊中は「一つの都市を構成するものではなく、大都市大阪という一つの都市の一部分であり……（一一四頁）」「大阪第一次都市圏の北部を形成する郊外住宅地（一一三頁）」に過ぎないと結論して理由として一〇項目を挙げている（一一三頁）が、此の項目中には若干の異論がないでもない。即ち「(1)本市は従前都市的基盤の皆無のところ近年発達した都市的地域である。」は更に註をあげて、豊中が都市の核をもつた事がないとしているが、此の点については現在同市のほぼ中央にある岡町・豊中高駅間の旧能勢街道に沿う部分が岡町と称して徳川末期には商業集落を形成していた事は明治一八年測量の二万分の一假製地形図伊丹図幅によつて、町村制施行前の岡町村が密集した三重路村を形成し、その村域内に殆んど豊

耕地を有しない事、また同地の古い民家が現在では商業を営んでいないが町屋的な構造を示している事等より推定し得るのである。もとより大なる都市集落ではなく、現在ではその商業的機能は駅前の商店街に奪われて了つたのであるが、住宅地發展の初期に於ては此等の商業集落が基盤となつた事は疑えない事実であり、後に交通の利便が増し、ターミナルデパートの開設等によつて大阪への依存度が次第に増加して来たものとみるべきで、程度の差こそあれ、その他の衛星都市と異なる所はないかと思われる。此の点は豊中市の現況のみに重点を置き、過去の發展過程を看過して考慮する所なかつた本調査の一つの不備の現れでもあらう。

また「(10)本市の地域をバージェスの図表にあてはめてみると……本市は中央以北の中流以上の給料生活者の居住地と南部低地の工員その他の肉体労働者の居住地と最南端の工業地帯とのそれぞれ性格の異なる三層の地域からなる。したがつて本市は一つの大都市の構造中にその位置を見出す。」に就いても三層の地域分化は必ずしも E. G. Burgess のその

みによるものでなく、むしろ低湿沖積平野と高燥洪積台地という地形・地質的要素が大きいと考えられるのである。また Burgess の各 Zone に含まれるからと云つてそれが一単位の都市を形成しないとは言ひ難く、それ等の Zone 内にあつて更に小規模の Concentric Zones を形成し得るからである。従つてその点を明確にするためには市域内を出来る限りの小区画を単位として調査されねばならず、本調査に用いられた一二の学校区はその点では過大で、それを以て結論を急ぐのは危険であらう。以上を要するに豊中市が大阪の機能の一部を分担し、また全く大阪に依存する事は明らかであるが、尚形態上、田園地帯によつて明瞭に分離しており、また衛星都市は大都市の機能の一部を分担しているとする従来のご概念よりすれば、豊中市が都市でないとするこの結論はそれが市政考察に対する根本的前提となるだけに未だ十分に検討の余地があると思われる。尚細部に互つては自然環境叙述の正確、地図の利用の不徹底等地理学の観点よりの不満は仕方ない事かも知れないが、附録として巻末に入れられた調査の統計は極め

て豊富な資料を提供してくれるが、十分に消化されていない感があり、その利用が十分になされれば本報告書は更にその価値を高めるであらう。

(A5判・四二六頁・昭二八年一月・東京市政調査会刊・六七〇円)

——木下良——

### 執筆者紹介

今津 晃 大阪大学助教授  
 梅原末治 京都大学教授  
 牧健二 京都学芸大学教授  
 岡田芳三郎 平安女子短期大学助教  
 脇田修 京都大学大学院学生  
 池田誠 立命館大学講師  
 木下良 京都大学大学院学生